

「キリスト教から考える SDGs」

申命記 30 章 19～20 節

人文学部チャプレン 柳田 洋夫

30:19 わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、

30:20 あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。それが、まさしくあなたの命であり、あなたは長く生きて、主があなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた土地に住むことができる。

申命記 第 30 章 19-20 節

2021 年 9 月、コロナ禍真っ只中の頃、キリスト教の各教派の世界的代表者三人が共同でメッセージを出しました。「被造物保護のための共同メッセージ」と題されたもので、ローマ・カトリックの教皇フランシスコ、正教会の全地総主教バルトロメオス1世、そして英国国教会のジャスティン・ウェルビー・カンタベリー大主教の三人の連名で出されたものです。メッセージは、環境をめぐるサステナビリティ(持続可能性)を緊急の課題とするものです。

このメッセージはまず、コロナ禍において私たちは、「全員が安全になるまではだれも安全ではないこと、自分たちの行動が実際に他の人たちに影響すること、自分たちの今日の行動が明日の出来事に影響することを思い知った」と述べています。そして、未来の世代にどのような世界を残したいのかを私たちは今決めなければならないと言います。そのときに引用される聖書の言葉が、今日のみ言葉の 19 節「あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るように」しなさいというところです。私たちは、自分自身のためのみならず、未来の子孫に向けて「命」を選ばなければならないというのです。

これは当たり前のことのように思われるかもしれませんが、しかし、メッセージによれば、私たちはその逆の方向に進んでしまいました。すなわち、「将来世代を犠牲にして、自分たちの利益を最大化してきた」のです。そして、「自分たちの繁栄に神経を注ぐあまり、自然という資源を含めた長期的な資産は、短期的な利益のために食いつぶされていることが明らかに」なりました。私たちは、神さまから、自然を守る使命を与えられているにもかかわらず、自然を破壊し続けてきた、とも言われます。さらに、「わたしたちの多くは、他者への気遣いや地球の限界に対する配慮を欠いた行動をとっている」、その

結果、私たちは「厳しい裁き」、つまり、生物多様性の損失、環境悪化、気候変動などの問題に直面することになりました。同時に世界は、「深刻な不正義にも直面して」といいます。そして、その悲惨な結果に苦しむのは、もっとも貧しく、そうしたことにはほとんど責任のない人々であることが指摘されています。

それではどうしたらよいのか。「今この瞬間、わたしたちには、悔い改め、決意をもって方向転換し、反対の方向に進むチャンスがあります。生き方、働き方、お金の使い方において、身勝手な利益ではなく、寛大さと公平さを追求しなければなりません」。そのように言われています。それはまた、『神のために力を合わせて働く者』(創世記 2:4-7)として、この世界を支える責任を担うということです。もう少し具体的に言うと、「目先の利益や儲けだけでなく将来の利益を考え、これまでとは違った食事、旅行、支出、投資、生活のしかたを選択しなければならぬということです。それはまた、「もっとも弱い立場にある人々を中心に、より公正で充実した社会に向けて、皆で歩む」ということです。そしてそのためには、「共同体、教会、自治体、そして国として、わたしたちは皆でコースを変更し、新たな協力方法を見いださなければなりません」と言われます。そして、特に大きな責任を担う立場の者は、時には目先の利益を犠牲にする覚悟で、公正で持続可能な経済を実現するための指導者になるべきであるとも言われます。いのちを選ぶということは、犠牲を払うことでもあるからです。

メッセージは最後に、私たちにはみな、この取り組みのための何らかの役割があるはずであると述べ、子どもたちの未来と、わたしたちの共通の家[地球]の未来は、この今の私たちの取り組みにかかっている、今が正念場である、と述べています。

以上のように、いわゆる SDGs に関わる問題を、この共同メッセージは、聖書に基づいて、私たちと子孫の「命を選ぶ」ことである、という、いっそう大きな、根本的な視点から捉え直しています。ちなみに、本日の聖書のみ言葉の最初には、「わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く」とあります。「呪い」という言葉があつて、ちよつとこわいところですが、しかし、神さまは、私たちに呪いを「かける」、とは言っていません。あくまでも私たちの前に「置かれている」だけです。

これはどういうことでしょうか。それは、「祝福」を選ぶも「呪い」を選ぶも、私たちの自由に基づく責任の問題なのだ、ということです。言い換えれば、この世界を祝福と命の場にするか、それとも呪いと死の場にするかは、すべて私たちにかかっている、ということです。しかし同時に、神さまは、私たちが「命」を選ぶように呼びかけておられます。神さまは私たちを、愛と自由においてご自身に似たものとして造られました。本日のみ言葉は、今こそ、世界とその隣人のために、あなたたちの自由を愛において用いてほしい、そのように訴えかけているようにも思われます。

さらに言うならば、旧約聖書の「創世記」によれば、神さまは、この世界を、極めて良いものとして完成されました。神さまは、世界を出来損ないのままで放り出したわけではありません。だから、「呪い」ということ自体、そもそも神さまが造られたものではありません。それは実のところ、私たちがその罪ゆえに勝手に造り出してしまったものです。だからこそ、私たちは悔い改めにおいて、罪から回れ右をして神さまのほうに向き直り、「極めて良い」世界を取り戻さなければならない、今ならまだ間に合う、そのような神さまの呼び声が、聖書のみ言葉と、共同メッセージには響いています。

SDGs ということが言われて久しいですが、みなさんもぜひ、このような聖書的視点から、この人類的課題を自分なりに考え、また、自分なりの仕方に取り組んでいただきたいと思います。

2024 年 7 月 12 日 聖学院大学全学礼拝